

令和元年 12月 14日

# 南の風 323

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

3の、私が今までバスケットボールの指導をどのように学んできたか、またコーチングで大事にしていることは何か、ということについてです。

せっかくの機会です。ミニバスが普及していった昭和40～50年代の様子を、記憶を辿りながら私自身の指導歴に被せて書きます。お付き合いください。

私は、バスケットボールをプレイした経験はありません。小学校の教員になってからミニバス（厳密に言えば小学校での特別クラブ）を通してバスケットボールの指導に携わりました。ですからバスケットボールについては全くの素人でした。

当時（昭和47年頃）は、体育の球技学習の中にバスケットボールはありませんでした。1～2年はドッジボール、3～4年はエンドボール、5～6年はポートボールでした。

ポートボールとは敵味方に分かれ（基本的に1チーム7人、内訳はゴールマン、ガードマン、プレーヤー5人）エンドラインの中央に置かれた台の上にゴールマンが乗り、味方からのシュートを取ると得点になるゲームです。味方のゴールマンの前には、敵のガードマンが立ちシュートを阻止します。ゴールマンとガードマンがいる区域には半円が引かれ、他のプレーヤーは入ることができません。

横浜市の各区毎に、近隣の学校（2～3校）が集まり区の球技大会（女子がポートボール、男子がサッカーでした。全員出場が基本で、チームを決められた数作って行います。）が行われていました。常盤台小は、帷子小と対戦していました。

私は昭和47年4月に横浜市立常盤台小学校（保土ヶ谷区）に教員として着任しました。

そこで岡田浩一先生と出会ったのです。岡田先生との出会いがなければ、私はミニバスケットボールの指導を携わることはなかったと思います。ある日、体育主任をされていた岡田先生にこう言われました。「区の球技大会があるのだけれど、女子のポートボールの指導を手伝ってくれないか。」「毎年帷子小学校が強くて、いつも大差で負けているんだ。何とか勝ちたいと思う。」

赴任した昭和47年は4年生の担任でした。球技大会は6年生が出場するため、実際の指導は6年生の先生が中心に指導します。ですから1年目はお手伝い程度でした。その年も帷子小学校は強く、対戦したチームの大半が負けてしまいました。

教員2年目は5年生の担任でした。岡田先生と一緒に学年を組むことになりました。そこで学年の先生と話し合い6年生になった時、『打倒！帷子』を実現するため、5年生から特別クラブの形で指導を始めました。当時は5年生の担任は、6年生まで担任するのがほぼ決まっていました。

体育館はまだありませんでしたので、朝練と時間のある放課後、また土曜日の午後に、男子のサッカーが校庭（第1運動場）、女子のポートボールが第2運動場で練習しました。女子の第2運動場は、整備がされていませんでしたので、石ころがあり、風が吹くとほこりが舞う状態でした。毎回石拾い、バケツリレーによる水まきをしてコート整備をしたのを思い出します。

こうしてポートボールの指導は始まりました。次号に続きます。